

第 2 章

山形大学教員研修会 「第6回 教養教育FD合宿セミナー」

平成18年度教養教育改善充実特別事業
第6回山形大学教養教育FD合宿セミナー
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」



「こまくさ」 蔵王山寮管理人 長岡 仁 氏 撮影

日 時： 平成18年8月7日(月)～9日(水)
場 所： 山形大学蔵王山寮(電話023-694-9669)
主 催： 山形大学教育方法等改善委員会
山形大学高等教育研究企画センター
共 催： 地域ネットワークFD“樹氷”

第 6 回 教養教育 FD 合宿セミナーパンフレットの抜粋

FD 合宿セミナーに当たって

山形大学は 6 学部を擁する総合大学です。教養教育は、総合大学の特性を有効に活用するために全学出動体制を採っており、それは山形大学の大きな個性にもなっています。学部の垣根を越え、山形大学全体の教育を考える上で、教養教育は全ての教員の共通基盤となるものです。また、生き残りをかけた大学改革に際し、授業の充実は最も重要な課題の一つでしょう。

今回のセミナーの第一の目的は、「個々の教員が、山形大学を支えることの意義と位置付け、教育の基本的構成要素、各授業科目の存在意義、授業設計、成績評価法などについて、あらためて主体的に検討し、再構築していただくこと」です。この目的を達成するために、まず、参加者の皆様に御担当いただく新しい授業科目について考えていただきます。そして、そのシラバスをグループで協力して作成していただきます。こうした一連の作業が有効な方法であることは、既に広く知られています。

セミナーは、本学への参画意識を高めるための 2 つのプログラムと、シラバスを作成するための 3 つのプログラムから構成されています。各プログラムは、グループ作業を中心に組まれており、参加者は学生が運営する学生主体型授業を体験することになります。

また、「教養教育を素材として、学部間の人的交流の拡大・充実を図ること」が第二の目的です。他部局の参加者と活発な議論を交わしながらプログラムを遂行し、セミナーが終了した後は、参加者が山形大学の教養教育を始めとした教育全般の発展に、より一層積極的に貢献されることを期待しています。

このセミナーは、「山形大学の構成員こそが山形大学の財産」という精神でのぞんでいます。

更に、このセミナーは山形県の大学・短大の FD ネットワークである“樹氷”を始めとして、全国の大学に開かれています。本セミナーが、相互研鑽の精神に則り、参加された大学・短大の発展に寄与されることを願っております。



第 6 回 山形大学教養教育 F D 合宿セミナー日程表

期 間 第 1 チーム : 8 月 7 日 (月) ~ 8 日 (火)

第 2 チーム : 8 月 8 日 (火) ~ 9 日 (水)

○第 1 日目

時 刻	項 目	担 当
12:50	山形大学集合・受付（正門付近）	事 務
13:00	送迎バス 大学出発	
14:00	会場到着 セミナー開会 開会のあいさつ	司会 : D R - A
14:30	アイスブレイキング	D R - B
14:50	オリエンテーション	D R - A
15:00~16:30	プログラムⅠ「大学へのニーズと課題」	D R - A
16:30~16:40	休憩（10分間）	
16:40~18:10	プログラムⅡ「どのような大学にするか」	D R - A
18:10	休憩・夕食など	
19:30~21:00	プログラムⅢ「科目設計 1 : 授業名と目標の設定」	D R - B
21:00~21:10	休憩（10分間）	
21:10~22:30	懇親会	D R - B
22:30	中締め	
23:00	就寝	

○第 2 日目

時 刻	項 目	担 当
7:30~	朝食・部屋退出	
8:30~10:00	プログラムⅣ「科目設計 2 : 授業内容の作成」	D R - B
10:00~10:10	休憩（10分間）	
10:10~11:40	プログラムⅤ「科目設計 3 : シラバスの完成」	D R - B
11:40~	修了式	D R - A
12:20~	昼食	
14:30※	送迎バス 蔵王山寮出発	
16:00頃※	大学到着 解散	

※第 2 チームは 13:30 送迎バス 蔵王山寮出発、15:00 頃 大学到着 解散となります。

【留意事項】

- セミナー期間中の途中からの参加及び離脱は禁止とします。
- セミナー期間中の個人の呼称は、「〇〇さん」とします。
- 食事はセルフサービスとなります。食事時間になりましたら、共同で配膳作業等を行ってください。
- 1 日目の入浴時間は設けておりませんので、18:10~19:30 の時間帯で御利用ください。
- 起床と同時に、寝具を使用前と同様に整理・整頓し、使用した宿泊室・廊下等を清掃してください。
- 退出の際は、使用したシーツ・枕カバーをたたんで、指定する場所に返却してください。

第 6 回 山形大学教養教育 FD 合宿セミナー 班名簿

第 1 チーム：8 月 7 日（月）～8 日（火）

DR-A	中 村 三 春
DR-B	今 野 健 一

プログラムⅠ・Ⅱ

A 班：ドリームキャスト班		B 班：地蔵班		C 班：いもに班		D 班：三五郎班		E 班：山だいですき班	
人文	渡 邊 洋 一	人文	阿子島 功	人文	西 上 勝	人文	山 崎 彰	人文	小 熊 正 久
地教	楠 本 健 二	人文	森 田 光 弘	地教	田 村 朝 子	地教	藤 岡 久 美 子	地教	坂 野 麻 里 子
工	神 戸 士 郎	地教	大 澤 弘 典	医	澤 村 佳 宏	工	幅 上 茂 樹	医	緒 形 真 也
工	立 花 和 宏	工	谷 口 貴 志	工	森 秀 晴	工	下 馬 場 朋 禄	工	平 田 拓
産庄	齊 藤 み どり	米短	横 田 明 紀	農	岩 鼻 通 明	保医	八 木 忍	宝短	菱 田 隆 昭
福島	岡 田 努	新看	関 谷 伸 一	茨城	馬 場 肇	米短	川 越 有 見 子	神女	馬 場 恒 子
岐医	安 藤 邑 恵	岐医	松 下 延 子	宝短	由 田 新	京教	杉 本 厚 夫	北専	中 山 博 愛
				新看	中 野 正 春				

プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ

A 班：おばこ班		B 班：花笠班		C 班：パチンコ班		D 班：チーム 21 班		E 班：禁煙班	
人文	阿子島 功	人文	西 上 勝	人文	小 熊 正 久	人文	山 崎 彰	人文	渡 邊 洋 一
地教	田 村 朝 子	地教	楠 本 健 二	地教	坂 野 麻 里 子	地教	大 澤 弘 典	人文	森 田 光 弘
工	幅 上 茂 樹	医	澤 村 佳 宏	医	緒 形 真 也	工	神 戸 士 郎	地教	藤 岡 久 美 子
農	岩 鼻 通 明	工	下 馬 場 朋 禄	工	立 花 和 宏	工	平 田 拓	工	森 秀 晴
産庄	齊 藤 み どり	保医	八 木 忍	工	谷 口 貴 志	米短	横 田 明 紀	宝短	由 田 新
福島	岡 田 努	新看	関 谷 伸 一	米短	川 越 有 見 子	岐医	松 下 延 子	岐医	安 藤 邑 恵
宝短	菱 田 隆 昭	神女	馬 場 恒 子	茨城	馬 場 肇	京教	杉 本 厚 夫	北専	中 山 博 愛
				新看	中 野 正 春				

第 2 チーム：8 月 8 日（火）～9 日（水）

DR-A	元 木 幸 一
DR-B	長 谷 見 晶 子

プログラムⅠ・Ⅱ

A 班：とてもえー班		B 班：パラダイス班		C 班：もみぢまんじゅう班		D 班：花笠班		E 班：いい班	
人文	阿 部 宏 慈	人文	阿 部 成 樹	人文	鈴 木 均	教七	坂 本 明 美	人文	洪 慈 乙
地教	角 南 俊 介	地教	伊 勢 孝 之	地教	藤 野 祐 一	理	脇 克 志	医	野 崎 直 樹
工	古 閑 敏 夫	工	佐 野 正 人	医	鈴 木 育 子	工	大 場 好 弘	工	金 子 勉
農	小 関 卓 也	農	安 田 弘 法	工	齊 藤 敦	岐医	山 口 明 子	東公	杉 山 肇
産技	庄 司 英 明	山短	加 藤 大 鶴	産技	堤 和 司	浜松	小 野 澤 隆	岐医	吉 川 一 枝
玉川	切 田 節 子	京芸	廣 中 主 司	滋短	木 谷 康 子	阪府	高 橋 哲 也	京芸	君 野 隆 久
		福県	夏 原 和 美	広経	村 山 秀 次 郎				

プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ

A 班：やっぱりええ班		B 班：ペア班		C 班：オリンピック班		D 班：台風七号班		E 班：出羽桜班	
人文	鈴 木 均	人文	阿 部 宏 慈	人文	洪 慈 乙	人文	阿 部 成 樹	地教	藤 野 祐 一
教七	坂 本 明 美	地教	伊 勢 孝 之	地教	角 南 俊 介	医	野 崎 直 樹	工	齊 藤 敦
工	古 閑 敏 夫	医	鈴 木 育 子	理	脇 克 志	工	大 場 好 弘	農	小 関 卓 也
農	安 田 弘 法	工	金 子 勉	工	佐 野 正 人	産技	堤 和 司	浜松	小 野 澤 隆
産技	庄 司 英 明	山短	加 藤 大 鶴	東公	杉 山 肇	岐医	吉 川 一 枝	京芸	廣 中 主 司
滋短	木 谷 康 子	玉川	切 田 節 子	岐医	山 口 明 子	広経	村 山 秀 次 郎	福県	夏 原 和 美
京芸	君 野 隆 久	阪府	高 橋 哲 也						

人文：人文学部 地教：地域教育文化学部 教七：教職研究総合センター 理：理学部 医：医学部 工：工学部 農：農学部
 保医：山形県立保健医療大学 米短：山形県立米沢女子短期大学 東公：東北公益文科大学 山短：山形短期大学 産技：山形県立産業技術短期大学校
 産庄：山形県立産業技術短期大学校庄内校 福島：福島大学 茨城：茨城大学 玉川：玉川大学 宝短：宝仙学園短期大学 新看：新潟県立看護大学
 岐医：岐阜医療科学大学 浜松：浜松大学 滋短：滋賀女子短期大学 京教：京都教育大学 京芸：京都造形芸術大学 阪府：大阪府立大学
 神女：神戸松蔭女子学院大学 広経：広島経済大学 福県：福岡県立大学 北専：北九州工業高等専門学校

オリエンテーション

(担当：DR-A)

1 FDの必要性

- ① 大学の社会的教育責務の明確化
- ② 大学教育を教員中心から学生中心へ移行することの教員の意識改革
- ③ 大学生の質の変化への対応

2 合宿セミナーの目的

- ① 教員個人が大学を支えること的位置付け
- ② 教育の基本的構成要素，大学における各科目の存在意義，授業設計，成績評価法などをあらためて整理する。
- ③ 教員相互の交流

3 セミナー形態

体験型のセミナーで，セミナー自体がグループ学習形式であり，参加者は，学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② セミナーのグループ構成：5班
班の構成員の年齢は幅広くする。「プログラムⅠ・Ⅱ」と「プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ」で，班構成を替える。
- ③ 各プログラムに，毎回，総合司会者と記録係を置く。(各班の持ち回り)
- ④ 各班に，毎回，司会者と記録係，発表者を置く。(持ち回り)
- ⑤ 全体と各班の記録係は，各プログラム終了後に記録を提出(この記録は，コピーした後，速やかに全班に配布)
- ⑥ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で，各参加者が各班の発表と質疑応答に対し，5段階で評価を与える。(この評価は，毎回回収し，整理した後，速やかに掲示する。)
- ⑦ 合宿セミナーに関するポストアンケートを実施

4 各プログラムの基本的形態

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ○各プログラムの講師による作業内容の説明 | 10分 |
| ○グループ作業 | 40分 |
| ○発表 各グループ
(各グループの発表時間4分×5班) | 20分 |
| ○全体討論 | 20分 |

全体で 90分

平成 18 年度 第 6 回山形大学教養教育 F D 合宿セミナー
「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」

セミナーの形態

体験型のセミナーで、セミナー自体がグループ学習形式であり、参加者は、学生が運営する学生主体型授業を体験することになる。

- ① 参加者によるセミナー全体の運営
- ② 班構成：5 班
班の構成員の年齢は幅広くする。班は、参加者を見て、当日までに委員会で決定しておく。
「プログラムⅠ・Ⅱ」と「プログラムⅢ・Ⅳ・Ⅴ」で、班構成を入れ替える。
- ③ 各セミナーに、毎回、司会者と記録係を置く。（各班の持ち回り）
- ④ 各班に、毎回、司会者、記録係及び発表者を置く。（持ち回り）
- ⑤ 各プログラムの基本的構成
 - 各プログラムを担当する講師による作業内容の説明 10 分
 - 班ごとの作業 40 分
 - 発表 各班の発表時間 4 分×5 班 20 分
 - 全体討論 20 分
- ⑥ 全体と各班の記録係は、A 4 版 1 枚程度に記録をまとめ、各プログラム終了後に提出する。
（この記録は、コピーした後、速やかに参加者全員に配布）
- ⑦ 参加者による相互評価：各回のプログラムが終了した時点で、各参加者が各班の発表（各 4 分で計 20 分）と質疑応答に対して評価する。5 段階評価とし個人は 15 点の持ち点を有する。
（この評価は、毎回回収し、整理した後、速やかに全班に配布）

プログラムⅠ 「大学へのニーズと課題」

各班同じテーマ 次のプログラムも念頭に置く。

- 大学の分析
 - ・大学の置かれている状況分析
 - ・社会的ニーズ
 - ・長所
 - ・短所
 - ・現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラムⅡ 「どのような大学にするか」

プログラムⅠの問題点等を踏まえた上で、大学の教育機能を十分に発揮するためには、これからのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。

大学の理念・目標を実現するための具体的行動目標、大学の「個性」と「売り」をどうするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められる。

- ①理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- ②方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- ③実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書等）
 - ・その宣伝・普及の方法（3 年計画案）
- ④評価（測定方法、学生、教員）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する。

プログラムⅢ 「科目設計 1 : 授業名と目標の設定」

各授業に分かれ、以下の指定された授業において適当な科目を作り、その科目名（名は体を表す科目名）とその学習目標を明らかにする。履修の時期も明確にする。

- A 班：大学の個性を発揮する授業
- B 班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携
- C 班：国際性を培う授業
- D 班：21 世紀の諸課題に対応する授業
- E 班：職業意識と労働意欲を培う授業

プログラムⅣ 「科目設計 2 : 授業内容の作成」

学習方略

授業内容（順次性を踏まえて設計）

授業の方法（講義，ビデオ，見学，調査，討論，担当教員等）

ここでは、「科目設計 1」で作った科目の授業内容を設計する。原則として、週に 1 回 90 分授業を 15 回実施するとして、15 回分の授業内容（方略）を設計する。授業の順序と各回の内容、授業法、媒体、資源などを現実的に示す。方略を設計するに当たり、目標の修正が必要になるかもしれない。この場合は、目標を手直しする。

プログラムⅤ 「科目設計 3 : シラバスの完成」

「科目設計 2」で設計した授業内容を手直しし、「評価」の項を加え、シラバスを完成させる。

成績評価

評価項目

評価方法

評価比重（%）

各グループの課題

○プログラムⅠ

グループ	課題
共通	大学へのニーズと課題

○プログラムⅡ

グループ	課題
共通	どのような大学にするか

○プログラムⅢ～Ⅴ

グループ	課題
A 班	大学の個性を発揮する授業
B 班	地域性と関連する授業：大学と地域の連携
C 班	国際性を培う授業
D 班	21 世紀の諸課題に対応する授業
E 班	職業意識と労働意欲を培う授業

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

(担当：DR-A)

○各班同じテーマ プログラム II も念頭に置く。
現実的、具体的に解析する。

- 1 大学には何が求められているか？
 - ・社会は大学に何を求めているか？
 - ・学生のニーズ
- 2 大学の置かれている状況分析
 - ・そこには、どのような課題（問題）があるか？
 - ・長所
 - ・短所
 - ・その生じさせている理由・原因は何か？
- 3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

プログラム II 「どのような大学にするか」

(担当：DR-A)

プログラム I の問題点などを踏まえた上で、大学の教育機能を十分に発揮するには、これからどのようなことを考え、実行していかなければならないか、具体的に提案する。大学の理念・目標を実現するための具体的行動目標、大学の「個性」と「売り」をどのようにするか。すべての班が同じテーマであるが、個性あふれる現実的企画を期待する。

大学の「売り」を作る企画が求められている。

- 1 大学の理念・目標
 - ・自覚的に個性的な校風を作り出していく
 - ・個性的な大学像（理念・目標、キャッチフレーズ）
- 2 方略（考えられるいくつかの方法、実現の可能性）
- 3 実行計画（主な活動、資源、時期、担当、責任、具体的企画書など）
 - ・その宣伝・普及の方法（3年計画案）
 - ・組織論（学部、学生の入口と出口（入試制度と就職）、学長と副学長制、委員会など）
- 4 評価（測定方法、学生、教員）
 - ・目標が達成できたかどうかを検証する

プログラムⅢ「科目設計 1：授業名と目標の設定」

(担当：DR-B)

ここでの課題

シラバス作成作業の第 1 段階として、各グループごとの課題に対応した授業名と学習目標の設定を行う。

プログラムⅢ～Ⅴの各グループの課題

A 班：大学の個性を発揮する授業

B 班：地域性と関連する授業：大学と地域の連携

C 班：国際性を培う授業

D 班：21 世紀の諸課題に対応する授業

E 班：職業意識と労働意欲を培う授業

作業 1 授業名の決定：○○○○○○○○○○（仮称）←内容確定後、最後に決定？

作業 2 学習目標の設定

1 踏まえておくべきことから：

- (1) 教員中心ではなく、学生による学習を中心に考える（教員の果たすべき役割の再検討）
- (2) 大学に対する社会的ニーズ
- (3) 大学の全体的な教育目標

註：(1)について

大学の役割

- | | | |
|-----------|---|-------------------|
| 講義の提供 | → | 学習方法と教育方法のデザイナー |
| 学生から独立 | → | 教員と学生を一つのチームと考える |
| 学力差を明確にする | → | すべての学生の能力と才能を引き出す |

成功へ向けて

- | | | |
|--------------|---|----------------|
| 伝授する資源の重視 | → | 学習と学生の成功の産物を重視 |
| 資源の量と質の重視 | → | 産物の量と質を重視 |
| 入学生の質の重視 | → | 卒業生の質を重視 |
| カリキュラムの発展と拡大 | → | 学習技法の発展と拡大 |
| 大学の質・内容の質 | → | 学生の学習の質 |

使命

- | | | |
|--------------|---|-------------------|
| 知識の提供・伝授 | → | 学習を生み出し、知識の発見と形成へ |
| コース・プログラムの提供 | → | 強力な学習環境の提供 |
| 教育の質の改善 | → | 学習の質の改善 |
| 多様な学生への対応 | → | 多様な学生を卒業させる |

教育

- | | | |
|-----------|---|------------------|
| 教員中心・知識伝授 | → | 学生中心・知識発見 |
| 教育の質 | → | 学習の質、学習効果・効率 |
| 指導者としての教員 | → | 学生の才能・能力を引き出す助言者 |
| 個人的・受動的学習 | → | 共同的・行動的・能動的学習 |

2 学習目標の記述

各科目の学習目標を表現することの必要性とその表現方法を学ぶ。学習の効果は、教育の受け手（学習の主体）である学生の変容で評価されるべきである。そのために、①授業の目標と②到達目標を定める。

注：授業の目標を作成する際の注意点

原則

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 学習の結果、いかなることができるようになるかを明示する

記述内容

- (1) 知識・技能の学習がなぜ重要か。それによって学生の要求がどのように満たされるかを明示する。
- (2) 複雑・総括的な概念を持つ動詞を用いる。
知る、認識する、理解する、感ずる、判断する、評価する、考察する、位置付ける、実施する、適用する、示す、創造する、身に付ける、等々
※単純な行動を示す動詞は用いない（述べる、列挙する、選ぶ、記載する等々）
- (3) 必要な目標分類（認知・態度・技能）を総括的に含める。

注：到達目標を作成する際の注意点

授業の目標を達成するためにどのようなことができるとよいか、具体的に明示する。

- (1) 学習者を主語として書く
- (2) 動詞を含むこと
- (3) 「理解する」のような概念的言葉ではなく、観察可能な行動を具体的に表す
- (4) 授業の目標と関連していること
- (5) 到達レベルを書く
- (6) 認知、態度、技能を分けて書く
 - 知識（認知領域）：知識を得て理解し、一定の能力を獲得する
述べる、説明する、分類する、比較する、解釈する、推論する、一般化する、適用する、結論する、批判する、評価する、等々の動詞
 - 技能（精神運動領域）：知識・能力を活かして意識的・具体的に行動する
感ずる、始める、模倣する、工夫する、行う、創造する、触れる、調べる、準備する、測定する、等々の動詞
 - 態度・習慣（情意領域）：獲得した知識・能力を、情報として相互に提供・交換し合う
行う、コミュニケーションする、協調する、示す、表現する、系統立てる、参加する、応える、等々の動詞

プログラムⅣ「科目設計 2：授業内容の作成」

(担当：DR-B)

ここでの課題

プログラムⅢ「科目設計 1」で作成した授業について、学習方法と道筋（戦略、学習方略）を明示する。具体的には、学習者が到達目標に達するために必要な学習方法の、種類と順序を示す。

作業

原則として、週に 1 回 90 分の授業を 15 回実施するものとして、授業の内容を考えてみる。その際、授業の順序と各回の内容、学習法、利用する媒体、資源などについて明示する。内容によっては、授業の目標、到達目標、さらには科目名についても変更が必要になるかもしれない。

註：学習方法の種類

- (1) 受動的学習法：講義など
- (2) 能動的学習法：①グループ討議（演習、セミナー、ディベートなど）
②実験・実習
③自習（読書、個人研究、コンピュータ活用学習など）

註：学習のための資源

- (1) 人的な面で：
- (2) 物的な面で：①場所
②媒体（スライド、OHP、標本、VTRなど）
- (3) 予算

プログラム V 「科目設計 3 : シラバスの完成」

(担当 : DR-B)

ここでの課題

プログラム IV 「科目設計 2」 で作成した授業について、シラバスを完成する。

○成績評価

その位置付け

- (1) 教育評価は、学生、教員、カリキュラム（目標、学習方法の立案（方略）、評価）の三者が対象
- (2) 成績評価は、その中の一つ。

留意点

- (1) どの行動領域を評価するか
 - ① 知識（認知領域）
 - ② 技能（精神運動領域）
 - ③ 態度・習慣（情意領域）
- (2) いつ評価するか
 - ① 学習前（プレテスト）
 - ② 学習中（中間テスト）
 - ③ 学習終了後（ポストテスト）
 - ④ フォローアップ・テスト
- (3) 評価の目的
 - ① 形成的評価：学生が理解している点、理解が不足している点を発見し、学習法、教授法へのフィードバックが目的。最終評価の参考にしない。
 - ② 総合評価：到達目標に対する学生の到達度を計測する。
- (4) いかに関評価するか、複数の評価項目のウェイト
 - ① 論述試験
 - ② 口頭試験
 - ③ 客観試験
 - ④ 実地試験
 - ⑤ 観察試験
 - ⑥ 論文（レポート）

評価の持つべき性格

- (1) 妥当性：計測しようと意図する項目を計測できる方法か？
- (2) 信頼性：計測結果の再現性は良いか？
- (3) 客観性：計測者（教員）が替わっても、同じ結果が得られるか？
- (4) 効率性：経済的にも時間的にも実用的か？
- (5) 特異性：なぜ、そういう解答がなされたか分かるか？

各プログラムの記録(第 1 チーム)

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

◆ グループ作業記録

ドリームキャスト班

司会者 岡田 努
 記録者 神戸 士郎
 発表者 渡邊 洋一

1 大学には何が求められているか？

社会のニーズとは… (自由討論)

- 産業界だけでない (渡辺)
- 自立できる 生きる力 (安藤)
- 工学部の 3 現主義 (現実・現場・現物) を大事に (立花)
- 世界共通の知識と能力 (安藤)
- インシデント・患者の権利 (安藤)
- 人権意識を持たせたい (安藤)
- 高校生が可能性に気付いていない (神戸)
- 技術を求める (齋藤)
- 就職をさせたい 親のニーズ 子のニーズ 実習科目を多く (齋藤)
- ドリル形式 食堂は (立花)
- エステ (安藤)
- 産業界, 高校生・保護者, 一般人 (齋藤)
- 地域性 在学生×社会人
- 施設 (食堂) の開放・知的リソースの開放・居場所・スポーツ施設 (民間)

2 大学の置かれている状況分析

- 長所: 専門書 (齋藤), 食堂が安い
- 短所: 参加意識が大切 (安藤)

3 現実的な制約・問題点, 改革の必要性など

人・モノ・金が必要 → 地域との連携で解決

まとめ (発表内容)

社会とは？

- ① 産業
- ② 高校生 (親)
- ③ 地域性

→ 焦点を合わせて →
 身近・利用可能
 な知的資源

状況分析

ハード

- ・ 食堂
 - ・ 図書館
 - ・ 体育館
 - ・ 居場所
- ソフト・人材

問題点・改革

→ 人・モノ・金の問題
 地域との関連で
 解決する

地藏班

司会者 森田 光弘
記録者 谷口 貴志
発表者 関谷 伸一

1 大学には何が求められているか？

社会・大学・学生のニーズ

1. 4年間遊ばせてくれるところ（学生）・常識（問題を起こさない）
2. 人材育成，自己教育力（社会）
3. 就職を保証してくれるところ（保護者，学生のニーズ）
4. たくましい（社会）
5. 問題解決力（社会）
6. 生命力 { つぶれない人材（社会）
多様な社会を生き抜く力
7. 普通の人間 ← 大学の教員，学生（社会）
・教養を与えてくれるところ ← 社会人

実践を求めている → 後で理論（学生）

2 大学の置かれている状況分析

短所

1. 動機付けを与えてこなかった
 2. 試験で出るものを覚えさせないといけない
- ↓ つめこみ型

学生の主体性を重んじる教育

長所

- ◎少人数のグループ
- ◎学生の主体的なクラス

3 現実的な制約・問題点，改革の必要性など

国家試験，学生の評価に使うテストのためのつめこみ型教育

いもに班

司会者 岩鼻 通明
記録者 馬場 恒子
発表者 森 秀晴

1 大学には何が求められているか？

- ・ 地方大学，単科大学におけるケースで考える：**社会性**，**専門性**，**地域性**のバランス
- ・ 社会：納税者としての立場 ← 説明責任
「常識ある」社会人，即戦力を求める
- ・ 学生のニーズ：就職（医・資格取得系を除く）
特に単科大学に入学してくる学生は，目指すものがはっきりしている
総合大学においてはどうか？（知るのが楽しい ↔ 目先の就職）

2 大学の置かれている状況分析

少子化，全入時代といった課題 → 差別化をどう図るか
カリキュラムの改革に差がある

実学 ↔ 基礎
工・農・医 文・理
単科大

人文学部（特に文学系）：選択の幅を広く持たせた → 「自分探し」できずに終わってしまう可能性有り

3 現実的な制約・問題点，改革の必要性など

- ・ 教養教育 ↔ 専門教育：大きなGap

『専門からの圧力大』

- ・ 高学年での教養教育（倫理教育 etc）の必要性
→ 必ずしも担当教員とマッチしない
→ 学外からの人材登用等の可能性を探る？
- ・ 医療法改正 → ニーズ変化
卒後教育等を充実したい！
土日は大学施設が使えない！

三五郎班

司会者 杉本 厚夫
記録者 藤岡久美子
発表者 山崎 彰

1 大学には何が求められているか？

- ・自分の大学の場合

杉本：教員養成大の場合・・・職業教育

「学校」の機能拡大に対応できる教師の育成

山崎：山大人文の場合・・・専門と就職は一致しない

キャリア教育，インターンシップ

八木：医療大の場合・・・各資格の取得

資格・専門以外の科目（教養等）も必要だが学生は興味を示しにくい。

- ・学生のニーズ

藤岡：資格，具体的なスキルの習得を求めてくる

杉本：職業への動機付けを求めている

→将来の職業への適性に気がつけるような授業

下馬場：相談

幅上：教員以外の立場がどう考えているか レベルで判断？

2 大学の置かれている状況分析

山崎：かつてとの違い，一定レベルの学生の維持，地域貢献，etc
多様なテーマへの対応が整理できていない。資源配分

八木：教員任せの学生の傾向

教員の意識改革が必要。

院（研究，職業専門）と学部教育

ニーズに合わせた組織改革必要。役割分担

藤岡：親も心配性

3 現実的な制約・問題点，改革の必要性

- ・教員組織の中で，役割の多様化
- ・大学毎の性格，目標の多様化
- ・自己決定できる学生

山だいですき班

司会者 平田 拓
記録者 緒形 真也
発表者 小熊 正久

1 大学には何が求められているか？

- 〔社会から〕
- ・ 全人教育（自立した社会人，やりたいことを探す）
 - ・ 地域社会への貢献，奉仕
 - ・ 専門的な知識
- 〔学生から〕 資格，就職，人間関係，娯楽

2 大学の置かれている状況分析

- 〔問題〕 学生獲得競争激化 → 教育のゆとり減
〔長所〕 地域の結びつき，組織の多様性
〔短所〕 組織のまとまりがない
〔理由・原因〕 経営，マネジメント（独法化による）
（経費削減により教育・研究の幅が制限される）

3 現実的な制約・問題点，改革の必要性など

- 〔現実的な制約〕 限られた資金とマンパワー
〔改革の必要性〕：
- ・ 教員の意識改革
 - ・ 研究と教育の分担（教員の再配分）
 - ・ 地域に開かれた大学へ
- 〔経営〕 スタッフ削減（年齢構成のいびつ）
研究と教育の分担
教員の意識を改革

小さくてもいい大学

- 〔制約〕
- ・ 資金
 - ・ 人員の再配分
 - ・ 意識改革

◆ 全体会記録

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

総合司会 立花 和宏
記録者 安藤 邑恵

1. 地域に働きかける方法
地域に働きPRするために——「知らない」ことへのアプローチ
→ 教員の意識改革をする（ドリームキャスト）
公開講座も活用可
2. 人材育成——大学のカリキュラム構築，教育制度は学生のニーズに合っているか？
(地蔵)
娯楽，何を求めているかがわからない学生もいる。
3. 今のカリキュラムに専門性（芋煮）
低学年で教養すべきか？
高学年の教養教育をした方がよい……
4. 山大すきへ → 学生が最高水準の教育を求めているか？
教員は最高水準の研究を放棄してよいか
↓
教育，研究には個人的な背景に求めざるを得ない
5. 経営的側面から → どんな教育をしていくか？（自立した社会人になるために）
学生の質の問題（ついていけない学生）
地蔵班はどうか → 少人数—自由な発想を展開，教養教育あまり進められていない。
動機付けはどうするのか？



プログラム II 「どのような大学にするか」

◆ グループ作業記録

ドリームキャスト班

司会者 楠本 健二
記録者 齊藤みどり
発表者 立花 和宏

1 大学の理念・目標

地域に開かれた大学作り

キャッチフレーズ 親しみやすいもの

ユリハカ（ゆりかごから墓場まで）

生まれてから死ぬまで面倒をみます。飯を食って健康になろう

2 方略

朝食が食べられる

食堂で先輩と飯が食べられる

ポイント制にする

お母さんにかわって弁当を作る

図書館で勉強ができる 本が借りられる

図書館と食堂を合体させる。

3 実行計画

資金

卒業生が食堂にお金を入れる 卒業生の寄付

宣伝、普及の方法

TV・ラジオ・新聞広告の掲載

地域住民向け体験ツアー（定期的にする、在学生が案内）

在学生の母校での宣伝

4 評価

受験者数

教員のコーディネート件数

アンケート

結論 目指せ地域のライフライン

地蔵班

司会者 阿子島 功
記録者 松下 延子
発表者

どの様な大学にするか → 個性を売り (逆転できる大学)

1 大学の理念・目標

社会のニーズ

悠々自適

地域に根ざし世界をめざす

逆転できる大学・・・入る時より出る時の能力を高める

卒業生の評価、就職先の評価 積極的に生きる人間を社会は求めている

→ そういう学生に育てる方略

大学 院生に対し テーマ選択、会社の人と進める。自分自身が主体となつてできるよう、判断しまとめていける人間を育てる。

(自分自身主体的にできる人間を育てる)

理系、文系 自発的学習—自主型、自己決定型

企業の参加
学生中心に
まかせられている
責任を持つ
自分の発想でできる
学生の中で公開できる

2 方略

学生に経営・運営をまかせる

ふれあい実習で各家庭に訪問する ホームステイプログラム

人間の生活をもてみる 社会を知る 病院、企業を見学させる

結論 現実を見ることで・・・動機付けが得られる、主体性が図れる

自己計画としてはどのように動機付けをしていくかが重要

インターンシップ (単位：卒業単位にはなっていない)

学外との連携 (社会に出会い、社会を受け入れる)

個人情報がこのところにあつてそこに行つて何ができるのか・・・

制約はあるか?・・・受け入れが大変、評価が難しい

工場見学：早い時期から必要な技能を知る

(知った上で自己学習することが重要ではないか)

自ら学んだことをプレゼンテーションする

体験を学生に報告させている

自分自身が体験発表することは大切であり、聞いた側は人の体験が聞ける

3 実行計画

1～2年 見学実習

4 評価 — 時期的なことの問題

◎負荷価値 何であったか

3～4年に教養教育…選択で
観察実習

法学部——バスで連れてくる（募集）

やる気がなくなる（早い時期に行った方がよい）

将来どういふことをやるかを見せておく

何度も行った方がよい

先輩の実施しているところを見せる 100人以上連れてくる
卒業生に参加してもらうことで（設定する）

やるべきことが見えてくる

学生自身による自己評価を行うことによって…成果が上がったか

（自己を認識できる）

◎縦横の連携がある…インターンシップの活用（横）、卒業生の参加（縦）

しかし教養として活用するには困難（専門基礎としてはできる）

→自由に取ることができるが取ろうとしない

（専門になってゆとりが無くなるためではないか）

語学教育で少人数であればできる

3～4年の教養カリキュラム…選択が減少していく

参加した学生は得をする

インターンシップ

評価の基準 入口と出口の自己評価をする

自分が大学でやったことがどのように役立っているか評価する



いもに班

司会者 中野 正春
記録者 田村 朝子
発表者 澤村 佳宏

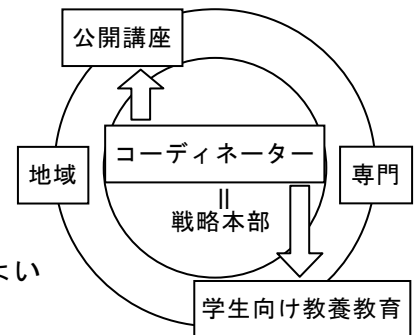
1 大学の理念・目標

個性的な教育 → 大学のウリにつながる「いも煮大学」
研究と教育を分離しない
看板教員が教育も行う（教養教育，全学教育）
『グローイング大学』 Growing University 開かれた大学
“改革”ではなく“成長”＝グローイング

2 方略

(1) 公開講座 → 学部横断的な公開講座（社会性，地域性，専門性）
コーディネーターが重要 教育面と研究面
研究面では戦略室などが作られ，お金もついていてやりやすいが，教育面ではなかなか難しい状況である
非常勤の有効活用（研究室の確保，図書館の利用）
→ 授業のボランティア化？

- ↓
- ・教養教育のあり方
 - ・教育コーディネーターを専任させる
→ 高等教育センター
現在は兼任制だが専任化させた方がよい



3 実行計画

高等教育センターに3年任期制の教員を置き，戦略をねり広報・普及を行う
（外部資金の獲得）

4 評価

入学時と卒業時の成長評価（意識・偏差値）
保護者の満足度，高校教員の評価

三五郎班

司会者 八木 忍
記録者 下馬場朋禄
発表者 幅上 茂樹

キャッチフレーズ『自己決定ができる学生を育てる』

1 大学の理念・目標

- ・ 自己決定能力を養うための教育は？
 - ・ 受動的授業ではなく、能動的に（体験学習など）
 - ・ 高校 → 大学へのGAPが大きい このGAPをやわらげる仕組みが必要
 - ・ 動機付けをどうするか

2 方略

- ・ オリエンテーション時に集合場所を遠くに設定
 - 大学は自分で調査，考えるところだと認識させる
- ・ 英国の GAP year 制度を導入するのもあり
- ・ 自己決定は1人だけではなく，グループからも得られる
 - 現在はサークルや縦のつながりが少なく機会が減っている
- ・ 卒研配属，ゼミの実施時期を早める
- ・ 卒研，ゼミの配属生と下年度生とペアを組む

- ・ 教養は他者との雑談からも得るものが多い（耳学問）
- ・ 無駄と思われる知識も重要

3 実行計画

- ・ 1年生前期を GAP year に…
- ・ 早期に研究室・ゼミ配属
- ・ オリエンテーションを現在より長めに←自分で考える

4 評価

- ・ GAP year の評価はどうする？ → 評価なしでも良いのではないか
- ・ 大学祭の盛り上がりで，大学の活力を評価
- ・ 就職活動の状況

山だいですき班

司会者 坂野麻里子
記録者 菱田 隆昭
発表者 中山 博愛

1 大学の理念・目標

キャッチフレーズ大切

地域貢献を目標にしていく → 地域社会，日本から世界へ，が見える目標を
卒業生で，社会で活躍する人を 1 つのモデルに
主体性の育成

2 方略

地域を知る学習（歴史，産物など）

キャリア教育 インターンシップの充実

動機づけ：早い段階で体験学習を取り入れる

3 実行計画

入口

- ・ 学校訪問，宣言を広く
- ・ 出前講義，学校説明会への出席
- ・ 工場見学

出口

- ・ 会社訪問
- ・ 連携，学長のパフォーマンス（？），地元に残す

4 評価

- ・ 授業アンケート——教育内容を知る（体験学習後に学生の自己評価）
- ・ 卒業式の日満足度評価をする
- ・ 卒業生へのアンケート（工学系 JABEE の項目に含まれる）
- ・ 教員の自己評価，社会貢献度も

学生に学校経営の一端を担う機会をつくる

これを授業の中でできないか

同一地域の大学の連携（その地域に人を呼ぶ，社会人を呼ぶ）

◆ 全体会記録

プログラムⅡ「どのような大学にするか」

総合司会 阿子島 功
記録者 関谷 伸一

1. 共通項目がいくつかあったので、まず卒業生の活用は具体的にどのようなものがあるか？
ドリームキャスト班：お金
山だいすき班：2～4年位の卒業生を対象
地蔵班：具体的には考えていなかったがコーディネートはどうする
2. 大学祭の活用は？
三五郎班：様々なグループ間の交流による活性化が期待できる
卒業生は財産である
3. 公開総合講座のコーディネーターは？
いもに班：専任でないと大変だろう。評価について追加したい
学生の満足度，地域
4. 山大では入学生に所信を記入させた
評価方法について・・・特に意見なし

図書館と食堂を合体させたいというがどのようにするのか？
ドリームキャスト班：勉強に疲れたら食堂で休む
5. 図書館，食堂の解放についてどうか？
ドリームキャスト班：解放されているがあまり知られていない
6. 公開講座はどのようにするのか
三五郎班：自分たちのスタッフを熟知していることが必要
誰にやってもらったらよいか
三五郎班：定年退職教授にやってもらったらよい

プログラムⅢ 「科目設計1:授業名と目標の設定」

◆ グループ作業記録

おばこ班

司会者 幅上 茂樹
記録者 阿子島 功
発表者 田村 朝子

<大学の個性を発揮する授業>

①【授業科目名】 『おばこ大学学』（仮称）

【対象学生】 1年生・前期

【素材】 自分の大学の個性（施設、研究）やウリを調べさせる ※施設、研究…

②目標設定

【到達目標】 地域対象（市民・高校生・中小児童）のPR presentationとしてまとめて、地域へ還元する

【学習目標】 立案できる

【教員の役割】 それぞれのグループごとへ、情報提供とコーディネート

【社会的ニーズ】 地域に開かれた大学となることを学生自ら実践する
何が求められているかを考えさせる。

【教育目標】 学生が自ら調べまとめる学習の動機付け
大学での学び方

③【学習目標のまとめ】 ——文章化すると；

【授業の目標】 学生が『おばこ大学』の魅力を手自ら積極的に調査し、発見することができる

さらに、それを地域社会に還元することができる

それぞれの発表をまとめる、あるいは相互に評価することができる

【到達目標】 問題を発表する

〔認知〕大学の魅力を発見することができる

社会のニーズを分析することができる

〔技能〕調査研究の方法を身に付け、発表する技能を学ぶ

〔態度〕調査した結果を協働して伝えることができる

花笠班

司会者 下馬場朋禄
 記録者 馬場 恒子
 発表者 西上 勝

<地域性と関連する授業：大学と地域の連携>

地元企業へ見学

これまでの例 { 新しい観光プログラム ← 地元からの要請, 商工会議所
 がんぎ通りの設計
 昔ながらの家 → 芸術
 大地の芸術祭

地域についての調査だけでは一方的 → 問題点をださせて, 公開発表会
 → 地域への feed back できていない

学生 ↔ 地域の人々 (give&take)

- ・ 地元の企業との共同研究 都市生活, アルコール, タバコと人々の調査
 学生達に達成感を感じさせる必要がある (何かをつくらせる…)
- ・ 地域再建案を考えさせる

「○○ before after」 → 問題点をみつけて今後への提案

↓ 地域再発見 → 調査地域住民との交流

↓ 地域の歴史

↓ 酒・そば

↓ 新しい関心領域の開発

↓ 地元指向

↓ 学生がテーマを決める

↓ 多分野に渡る (歴史, 文化, 経済, 医療)

【授業科目名】 『○○ before after』

【授業の目標】

地域がかかえる諸問題を発掘し, その背景を調査し, 問題点を明確化し, 改善や方策を提案する。

【到達目標】

調査する, 評価する, 系統立てる, 立案する, 提言する, コミュニケートする

パチンコ班

司会者 谷口 貴志
記録者 坂野麻里子
発表者 立花 和宏

<国際性を培う授業>

【授業科目名】 『国際特許出願』

目標：1 個発明を出願する（国際的な知的財産を知る）
（特許の内容は入らず，出願の方法を学ぶ）

①授業の目標

- ・国際的な知的財産を知る

社会的ニーズ：工学 → Skill として必要

人文系 → 国家間の法律の違い，文化の違いの理解

◎社会的背景を理解

例：先発明主義 <=> 先願主義（日本，ヨーロッパ）
（アメリカ） （考え方の違い）

◎一般的国際人（文化を理解して，国際社会に貢献）が求められている

【授業の目標】

各分野（理・文）にわたって活躍できる人材の育成

【学習目標】

1. 授業の目標

知的財産権が国によって違うことを理解し，経済活動に応用できるようになる

2. 到達目標

- ・国際特許出願に必要な項目を理解する
- ・国際特許出願書を書く



チーム21班

司会者 平田 拓
 記録者 神戸 士郎
 発表者 横田 明教

<21世紀の諸課題に対応する授業>

21世紀の課題

情報（大沢），コミュニケーション（杉本），学生の常識（横田），依存性が高い（松下）
 環境とエネルギー（神戸），循環型社会（山崎），グローバルゼーション（平田）

→ タイトル『循環型社会』

授業の方法

- ・ロボコンなど（山崎）
- ・学生が自分でアクションを行う（平田）
- ・創造性（松下）
- ・食べ残しを減らす（杉本）
- ・日常社会から循環型社会を考える（杉本）

学習目標

【授業の目標】 それぞれの身近なテーマから目標を探せる

- ・日常生活（ローカルな視点）からマクロ的な問題（グローバルな視点）を理解する
- ・自律的に問題を解決する能力を持つ
- ・生き方，価値感の共有
- ・無害で安全なものを考える

【到達目標】 生活の中から実感できる

- ・循環型モデルの共有感を持つ

禁煙班

司会者 森 秀晴
 記録者 森田 光宏
 発表者 藤岡久美子

<職業意識と労働意欲を培う授業>

◎1年生で入ったときどうするか？ → キャリアへの動機付け
 目標「自分が働いている姿が想像できる」

→ ①なぜ働くのか

- ・『楽しさ』を伝える
 - ・『やりがい』を伝える
- } ここでは例として「工学部向け」を考える

②働いてどうなりたいのか

■ modeling：卒業生のモデルの提示と情報提供

→ 具体像 ← 学科などにより多様な像がある

【授業の目標】

- ・学生が就職した時の自分の姿を明確にできる
- ・就職した時の楽しさややりがいを実感できる
- ・就職するためのルートが明確になる

【到達目標】

- ・なりたい自分の仕事を書ける（会社名など）
- ・職業を分類できる
- ・職業のロール・モデルと知り合う → ライフ・デザイン

【授業科目名】

『キャリア・デザイン』

◆ 全体会記録

プログラムⅢ「科目設定 1：授業名と目標の設定」

総合司会 谷口 貴志
記録者 中野 正春

総司会：テーマが各自違うので発表に対して疑問をそれぞれ用意する。
それについて後ほど述べる

おばこ：『おばこ大学』 学び方 大学の施設、地域の個性を発見
地域の人にPRする。学生主体として、教員はそれを援助する
学生グループ各々発表・・・まとめる 大学の魅力を発見できる
協同して地域の方々に伝える

Q：1年生で地域の特徴を理解可能か（禁煙）

花笠：地域性とは・・・新しい観光、都市生活
地域住民との交流により学生が問題を発見する
それに対して提言できる → 公開講座等に発展を
『〇〇 Befor after』 歴史 文化 医療 保健 産業 経済

Q：文学では特許出願は難しいのでは？
学生が主体となって学習するのは難しいのでは？（おばこ）

パチンコ：『国際特許出願』国際的文化的の違い、法律の違い
→国際的人材 各分野（理・文学）で活躍できる 特許出願までできる

チーム 2 1：『循環型社会』
グローバリゼーション、エネルギー、中東、
コミュニケーション、情報
すべて循環した社会の中で動いている
学生が自立して主体的に取り組む
日常的問題 → グローバリゼーション
なぜこの授業が必要か（資源限りある中で分け合える）

Q：追跡調査するのか（主催者）

A：学生が会いに行く

禁煙：共通感 共有するための学生主体の問題
働く自分のイメージを持つ なぜ働くのか
働いてからどうなりたいのか 就職する自分のイメージ
就職してから楽しさややりがいを感じられる
職業の種類を分類できる 具体的会社名をあげられる
職業のロールモデルと知り合う（卒業生etc）
具体的会社名をあげられるとは（パチンコ）（他の業種についても内容を理解できる）

プログラムⅣ 「科目設計2:授業内容の作成」

◆ グループ作業記録

おばこ班

司会者 齊藤みどり
記録者 岩鼻 通明
発表者 岡田 努

『おばこ大学』学の授業内容

1. 探す
 - ①オリエンテーション → グループのフィールドワークで
 - ②キャンパス内「お宝探し」 → フィードバック
 - ↓
 - ③ 「 」 2 ← 教員アドバイス
 - ④学生のグループ編成 → 討論 → 発表 教員コメント
2. 調べる
 - ⑤プランニング
 - ⑥ } 学内, 学外でのフィールドワーク 担当教員とTAとで分担
 - ⑦ } 各グループ5~6人編制
 - ⑧ }
 - ⑨担当教員からまとめ方(OHP, パワーポイントなど)についてのアドバイス
3. まとめる
 - ⑩ } グループ内討議によるフィールドワークの
 - ⑪ } 整理及び取りまとめを行って発表の準備
 - ⑫ }
4. 発表する
 - ⑬各グループの報告, レジメ提出
 - ⑭討論——大学の個性とは何か?
 - ⑮総括・提案・報告レポート作成 → おばこ大学のウリ!!

P. S. 大学祭・オープンキャンパス・ホームページでの成果報告



花笠班

司会者 澤村 佳宏
 記録者 楠本 健二
 発表者 八木 忍

学習の種類 (2) 能動的学習法 : ①グループ討議中心

「〇〇 before after」 : 色々な分野にわたる問題点を自分たちでまとめて解決策等を示す



ある程度こちらで決めておく

具体的な例

サブテーマ

- 歴史・文化・・・上杉謙信 おしん
- 経済・観光産業・・・紅花 温泉 祭り スキー 将棋 川下り 織維
- 地域・農業・・・さくらんぼ 果実 牛
- 医療・・・少子化 高齢者問題
- 環境問題・・・樹氷 温暖化 酸性雨 水源

各分野 : 10人 5分野 : 50人 選択させる (第1志望, 第2志望)

サブテーマ : 5人グループを作って調査を行う

調べる・資料収集

新聞記事



問題点を明らかに
 { 専門家に話を聞く
 住民
 行政

発表 : OHP コンピューター

予算 : デジカメ コンピューター お土産

授業の流れ

1. オリエンテーション
2. グループ分け, サブテーマ決め
3. } グループ討議
4. }
5. } グループ討議, 調査・まとめ
6. }
7. まとめ
8. 中間発表 before 問題点を示す
9. } グループ討議
10. }
11. } グループ討議, 調査・まとめ
12. }
13. まとめ
14. 最終発表 after 問題の解決策

パチンコ班

司会者 小熊 正久
 記録者 中野 正春
 発表者 馬場 肇

特許が考えられる分野：生物，工学，医学 etc

法律の問題：特許法（国内） 新規性等 7 つの要件
 海外（USP・・・） 国際条件：批准しているか → 国際出願

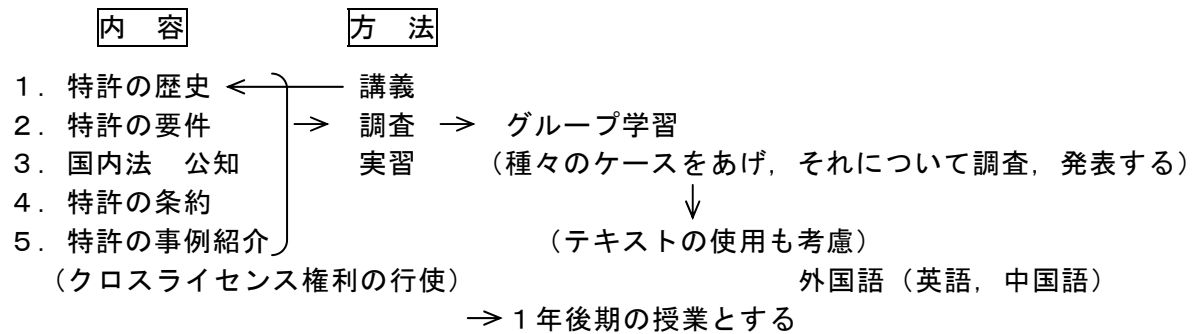
歴史：

法人発明 法人著作に関する特許

個人発明

知的財産権，知的所有権

出願すると知らないで使用すると訴えられる・・・権利の公知
 これについても色々な問題がある



8人×5グループ=40名（全学対象）

Web（新しいもの） 特許閲覧室（仙台） 古いもの

会社の知的財産担当の話 具体的事例の問題点

（実習）

仮想的事例・・・
 （エンジニア） 引き続きグループで活動
 （弁護士） T A の活用
 （メーカー）
 （消費者）

事前調査をする

方針の決定（どの国に出願する）

特許を書いてみる

（内容については特に評価しない）

チーム21班

司会者 大澤 弘典
記録者 杉本 厚夫
発表者 山崎 彰

学習目標：日常生活（衣・食・住）からマクロ的な問題を理解し、自立的に問題を解決する能力を持つ

到達目標：①知識 ・資源が有限であることを知る
・大量消費生活を批判する
②技能 ・エネルギーの再利用を工夫する
・過不足している資源の情報をコミュニケーションする
③態度 ・資源を共有することにより、エネルギー消費を小さくする方法を創造する

学 生：30人

学習方法：◎オリエンテーション（1回）

①見学（4回）…コンビニ、生協食堂、農家、肥料、ゴミ処理、発電所、里山

②講義（4回）…理系2回、文系2回 → 伝統社会から現代社会への歴史
→ 法的・政策的問題

↓
〔 技術的工夫
計量的工夫

③グループ討議（5回）…②の技能について（2回）

③態度について（3回）→ 現場に対する提案

④発表（1回）…工夫したことを発表する

↓
学生と教員による評価

教員は企画の成果と共に、グループで各自が果たした役割を評価

スタッフ：教員2名（理系1，文系1）

学外講師 数名

学生 6グループ30人

各グループ文系と理系の混合

場 所：見学場所

予 算：交通費など（マイクロバス1台…見学用）

禁煙班

司会者 藤岡久美子
 記録者 由田 新
 発表者 安藤 邑恵

禁煙大学

◎学生数，規模は？

工学部 120名 4クラスに分けて1クラス30人を対象とする（2単位・1年生前期）
 担当教員 1名／TA 3名

◎15回の授業（構想）

- ・事前学習
- ・インタビュー
（OB訪問）
（会社へ）
- ・発表
- ・事後にまとめる

訪問先はOBのいる
 様々な職種のある会社
 || (3社)
 大学の近くで
 交通費は各自負担

- ① OT：学生の職業への意識を知る（事前調査）
 アンケート
- ② 講義：職業に対する一般論 職業と人生
- ③ 講義：禁煙大学の性格に基づいた内容
 （実例 卒業生の例）
- ④ 事前調査：グルーピング（3人1組）
 知りたい職種，etcを調べる
 グループワーク，ネット，資料
- ⑤～⑥ 中間報告会：職業の種類，会社名等
 各班10分発表，質疑，コメント 両者の
 突き合わせ
- ⑦ 就職のルート…そのための技術 etc
 （卒業生） 学ぶべきこと
- ⑧ 中間報告（まとめ）
- ⑨ 訪問の割り振り：インタビューのやり方を考える
 何を聞くのかをまとめる
- ⑩～⑫ インタビュー：
 ・教員は学生を10人くらいずつに分けて現場へ連れて
 行く。
 → それ以降個別にアポを取って話を聞くことも可能
 ・残りの学生はTA（就職の決まった学生）から就職の
 話を聞く
- ⑬～⑭ インタビューの発表
- ⑮ まとめ レポート『自分のなりたい職業のイメージ』
 今の職業がイメージ，具体的に変わったか ←

◆ 全体会記録

プログラムⅣ「科目設計 2：授業内容の作成」

総合司会 平田 拓
記録者 神戸 士郎

(おばこ) おばこ大学

- ①～④ 探す オリエンテーション, 探索, グループ編成 (教員, TA)
- ⑤～⑨ 調べる ⑤調査計画作成&発表 ⑥～⑨学内外調査
- ⑩～⑫ まとめる ⑩まとめ, 発表手法 ⑪～⑫準備
- ⑬～⑮ 総括 ⑬クラス内発表 ⑭討論会

(花笠) before/after 学習方法の種類 ①経済 ②歴史・文化 ③医療 ④環境 ⑤農業

1. オリエンテーション 2. 地域連携 3. 講義
予算, 調査費, PC費, etc

(パチンコ) 国際特許出願

- 1 年後期, 40人 (8人×5), 講義・調査・実習 組み合わせ
- (1) 講義 ①歴史 ②要件 ③国内法「公知」の概念
④国による違い (条約) ⑤事例紹介
 - (2) 調査 ・インターネットを用いた調査 ・見学 (仙台)
 - (3) 実習 ・仮想事例 ・役割分担 ・方針決定 ・予備調査 ・書く

(チーム 21) 循環型社会に向けて

1. オリエンテーション (受動学習) (4)
①生協食堂 ②肥料 ③発電所 ④大学のエネルギー消費
2. 講義 (4)
①伝統社会→現代社会 ②京都会議以降の授業 ③温暖化メカニズム ④省エネ技術
3. グループ学習 (5)
①テーマ決定 ②～⑤実地調査, 機械, 制度, 法律, 仕組み, 企画書作成, 発表

(禁煙) キャリアデザイン

- ① オリエンテーション 職業によるアンケート
- ② 職業・人生
- ③ 講義
- ④ 情報
- ⑤ 中間報告
- ⑨ 事前指導
- ⑩～⑫ 3班 (卒業生訪問 1グループ, 就職活動 2グループ)
- ⑬～⑮ まとめ

Q & A

- (おばこ) 学外から学内を知る
- (花笠) 教員の役割は最初のみ。地域連携ができる
- (パチンコ) 文理系のコンビ, 出願シミュレーション
- (チーム 21) 共有感の到達目標は変更
- (禁煙) マイナスイメージも OK である

パチンコ班

授業科目名 『国際特許出願』 担当教員： 担当教員の所属： 工学部，人文学部 開講学年： 1年 開講学期： 後期 単位数： 2単位 開講形態： 講義及び 開講対象： 全学部 科目区分： 教養 グループ演習																											
【授業概要】 ・テーマ 国際特許出願 ・ねらい 知的財産権が国によって違うことを理解し，経済活動に応用できるようになる ・目標 国内外の特許制度について知る 特許の取得及びその問題点の調査をする 仮想的事例について出願を書いてみる ・キーワード 知的財産・特許制度・国際法・多国籍企業・グローバル経済																											
【授業計画】 ・授業の方法 講義，調査，実習 ・日 程 <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="padding-left: 20px;">・講義</td> <td style="padding-left: 20px;">5回</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">・調査</td> <td style="padding-left: 20px;">4回</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">・実習</td> <td style="padding-left: 20px;">4回</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">・プレゼンテーション</td> <td style="padding-left: 20px;">1回</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td style="padding-left: 20px;">・試験</td> <td style="padding-left: 20px;">1回</td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">合計</td> <td style="text-align: right;">15回</td> </tr> </table>				・講義	5回			・調査	4回			・実習	4回			・プレゼンテーション	1回			・試験	1回					合計	15回
・講義	5回																										
・調査	4回																										
・実習	4回																										
・プレゼンテーション	1回																										
・試験	1回																										
		合計	15回																								
【学習の方法】 ・受講のあり方 普段から特許に関するニュース，新聞等の記事に注目する ・予習のあり方 シラバス内のキーワードについて調べておく ・復習のあり方 事例について十分理解しておく																											
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 国際性を留意しつつ（国別の違い）特許出願の流れが説明できる 実習でかく特許明細書および行政文書が形式に則って書かれている プレゼンテーションで口頭試験により未知の特許を紹介できる ・方法 ペーパーテスト 実習（特許を書く） 調査した特許を発表（プレゼンテーション）																											
【テキスト】 日本発明協会「特許出願の方法」（800円）																											
【参考書】																											
【科目の位置付け】 弁理士，弁護士，技術士の資格を目指すのに重要																											
【その他】 ・学生へのメッセージ 特許をとって使える国際人になろう ・履修のに当たっての留意点 他者の障害になることは慎む ・オフィスアワー 授業終了後 ・担当教員の専門分野 工学・法律・経済																											

チーム21班

授業科目名 『コンビニから学ぶ循環型社会』 担当教員： 担当教員の所属： 人文学部，工学部 開講学年： 1年 開講学期： 前期 単位数： 2単位 開講形態： 演習 開講対象： 全学部 科目区分： 教養
【授業概要】 ・テーマ グループ学習を等して，循環型社会の構築のための方法とコミュニケーション能力の育成を目指す ・ねらい 日常生活（衣・食・住）からマクロ的な問題を理解し，自律的に問題を解決する能力を持つ ・目標 知識：資源が有限であることを知る。大量消費生活を批判する 技能：エネルギーの再利用を工夫する。過不足している資源の情報をコミュニケーションする 態度：資源を共有することにより，エネルギー消費を小さくする方法を創造 ・キーワード グローバリゼーション，エネルギー，コミュニケーション
【授業計画】 ・授業の方法 見学（施設等），講義の後にグループ討議を行い，それらをまとめて発表する ・日 程 <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②見学 コンビニ，生協 ③ 肥料生産，有機農業 ④ 発電所 ⑤ 大学施設のエネルギー消費 ⑥講義 伝統社会から現代社会へのエネルギー利用（エネルギー利用の歴史的変化） ⑦ 京都議定書等の法的制度的環境（京都会議以後の政策的条件） ⑧ エネルギーの種類，エネルギー消費の現状（エネルギー消費と温暖化） ⑨ エネルギー消費を抑制するための科学技術 中間試験 ⑩グループ討議 テーマの設定 ⑪～⑭現場にグループ毎に出て調査し，企画書を作成 ⑮発表
【学習の方法】 ・受講のあり方 循環型社会を実地で調査し，問題を発見し，解決方法を提示する ・予習のあり方 様々な媒体からエネルギー消費の現状を調査する ・復習のあり方 グループで提起された問題を調査し解決方法を用意する
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 中間試験（知識・理解）30％ 発表（関心・意欲・態度）70％ → （作成過程40＋成果30）＝企画書 ・方法
【テキスト】
【参考書】
【科目の位置付け】
【その他】 ・学生へのメッセージ ・履修のに当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野

各プログラムの記録(第2チーム)

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

◆ グループ作業記録

とてもえー班

司会者 古閑 敏夫
記録者 切田 節子
発表者 小関 卓也

1 大学には何が求められているか？

- ・ 想定する大学：ローカルで中規模の総合大学（蔵王最上^{ざおうさいじょう}大学）
 - ・ 社会は大学に何を求めているか？
 - ・ 企業 * ニートを出さない教育 （明確な勤労意識を持ち地域に
 - ・ 行政 ↓ 貢献する意欲を持つ自立した
 - ・ 保護者 **4年で卒業の必要はない** 人間を育てる教育）
 - ・ 学生 柔軟性のあるカリキュラム
- * 課題発見・問題解決力を育成
- ↑

 - ・ 表現力
 - ・ コミュニケーション能力
 - ・ 日本語の能力

2 大学の置かれている状況分析

- 長所：規模が小さい → 少人数制
地域に密着している
企業と学生の相互交流（ex：インターンシップ）
学部内のコミュニケーションが図れる
- 短所：受け皿が必ずしも充分ではない
地域に密着しすぎている
焦点がぼやける
大学は4年で卒業するものという常識がはびこっている

3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

- カリキュラム上の制約 → もっと自由に
人件費その他の予算

パラダイス班

司会者 廣中 主司
記録者 加藤 大鶴
発表者

1 大学には何が求められているか？

- 地域のための、地域との連携
学生とは都会的なものを指向する



地方に大学がある場合、アクセスが問題となる

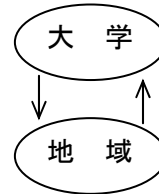
2 大学の置かれている状況分析

〈特色を持つ〉

- ・文化・知の拠点
- ・スポーツの拠点
- ・資格など、実践的な拠点

〈学園都市的イメージ〉

- ・コミュニティカレッジ？
- ・学生が地域に就職して、住むようになるためには、
地域産業を作る、活性化するプランが必要？



3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

- ・大学の予算の限界
- ・人口が少ない場合の対策



もみぢまんじゅう班

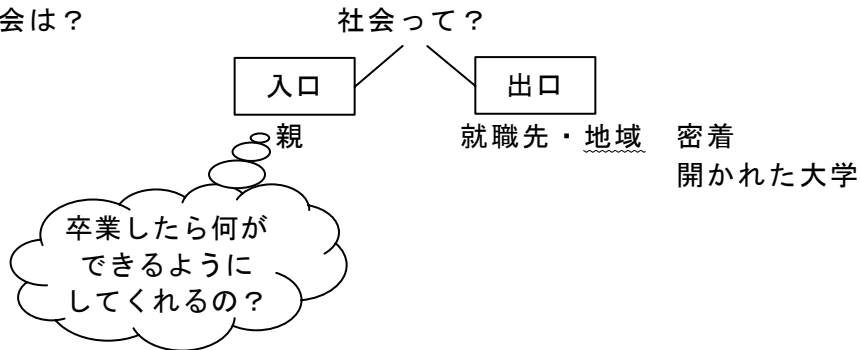
司会者 村山秀次郎
記録者 木谷 康子
発表者 鈴木 均

【もみぢまんじゅう大学】

総合大学 文系 3 学部 理系 3 学部
1 学部 200 名
1 学年 1, 200 名 計 約 5, 000 名

1 大学には何が求められているか？

① 社会は？



② 学生は？

- ・面倒見のいい大学 <=> 自主性は？
自立の問題
- ・資格取得（目的意識を持たせる）

2 大学の置かれている状況分析

志望者減 = 選べない

第？志望で入学した大学は帰属意識低い↓

《理由》

少子化

遊び経験少ない

コミュニティの関係 消

親のしつけ

3 現実的な制約・問題点、改革の必要性など

進路指導のあり方

中・長期計画が大切

中身が大事

大学独自の魅力のアピール

花笠班

司会者 高橋 哲也
 記録者 坂本 明美
 発表者 大場 好弘

設定：地方大学，複数学部

1 大学には何が求められているか？

説明責任，自立性（自律性），倫理観，コミュニケーション能力，創造性

専門知識，基礎学力，心の成長 ↑

・学生のニーズ

資格，就職，興味ある研究，地元の企業との連携

2 大学の置かれている状況分析

- ・課題（問題） 質の良い学生の確保，学生のどのような付加価値をつけるか
- ・長所 能力把握，受け入れ後のケア，きめ細かな指導
- ・短所 学生の都会志向で人気がない，マスコミへの露出度の不利

3 現実的な制約・問題点，改革の必要性など

- ・資産に乏しい（都会の巨大大学と比して）
- ・都会志向
- ・説明責任を実行する
- ・企業・卒業生からのアンケート
 ブランド力を持つ
 改革しないことをおそれる
 『意識の改革の大切さ』

いい班

司会者
 記録者
 発表者

大学設定：青森市内にある公立総合大学

1 大学には何が求められているか？

2 大学の置かれている状況分析

問題

過疎の進行

少子化：定員割れ

全入問題：学力低下

冬閉ざされる，就職先がない，アルバイト先までない

*大学の抱える問題 = 地域の問題

3 現実的な制約・問題点，改革の必要性など

☆県の活性化にすべての人が取り組む

地域

地域の期待が大学にも求められる！

◎全学・行政・市民が一体となり取り組むことの重要性

協調すること

- ・地域と連携できる産業
- ・地域から世界へ発信できる学科

☆社会のニーズに対し，応じるとともに長期的にこたえる

◆ 全体会記録

プログラム I 「大学へのニーズと課題」

総合司会 庄司 英明
記録者 角南 俊介

地域との連携，学生に対する教育の方法について，特に多くの議論がなされた。
質疑の内容は以下の通りである。

- ・大学の高等教育機関としての役割
 - * 地域との連携とは相反するのでは？
 - 高等教育機関である事は前提である。
- ・バーチャル大学とは？ネットワーク化した大学か？
 - * フェイス トウ フェイスが基本
- ・コミュニケーション能力改善に対する大学の役割
 - * グループ作業の必要性
 - * 日本語能力の育成 → グループ討論
- ・資格を大学で取得する問題点
 - * 学生のニーズには応えなければならない
 - * 学生のモチベーションになる
- ・研究機関としての大学のニーズ
 - * 研究することは前提である
 - 大学にとっても地域にとっても必要である

プログラムII 「どのような大学にするか」

◆ グループ作業記録

とてもえー班

司会者 角南 俊介
記録者 阿部 宏慈
発表者 小関 敏夫

1 大学の理念・目標

：地域が支える，地域に開かれた大学

『オラが大学』


→ 地域に存在する教育の力を大学に導入する
例) 退職者，OBなどによる教育

目標 地域の企業，教育界と連携しつつ，卒業後に役立つコミュニケーション能力，
プレゼンテーション能力を養う

2 方略

- ①OB，職業人によるセミナー
- ②学生の地域への派遣 → 高校生などの教育
理科離れ止め
- ③インターンシップの推進
- ④初年度（1～2年次）：プレ=インターンシップによるキャリア教育 → 実体験

3 実行計画

- ・宣伝・普及  公募 地域
ロゴ制定，キャッチフレーズの発表 → OB，企業から寄付求める
- 【1年目】：調査+試行的実施 → 評価
- 【2年目】：具体的なプランの策定：企業，自治体と共同
- 【3年目】：実行（宣伝・広報）
- ・組織
全学キャリア教育センター：プロジェクト人事（時限措置）
↓
民間人材，行政とのパイプ
学部から独立

4 評価

- ・受験者数の動向
- ・卒業後の離職率の低下
→ OBと常にコンタクトをとり続ける
- ・教員側のモチベーションの向上

パラダイス班

司会者 安田 弘法
記録者 阿部 成樹
発表者 夏原 和美

1 大学の理念・目標

『出会って、考えて、対話を深められる大学』

→ 知識，学生，教員，地域

特に：知域との相互教育機能

（背景：コミュニケーション能力，思考力の必要性）

2 方略

3 実行計画

大学と地域：地域広報の充実（共催イベントなど）

学生と教員知識：少人数教育（チームティーチング etc.）

学生と学生：入試におけるディスカッション

学生・地域知識：プロジェクト型の授業（地域住民もまきこんだ）

思考力↑ 市議会・商工会に参加 → レポート（地元意識）

4 評価

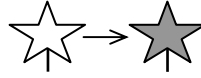
卒業時まで学生全員が学長・副学長と面談 → 評価にも利用



もみぢまんじゅう班

司会者 藤野 祐一
記録者 鈴木 育子
発表者 堤 和司

紅葉 → 学生を変える
まんじゅう → いろいろな味（個性）



1 大学の理念・目標

個性を伸ばし、地域の活性化に貢献できる人材を育成する

キャッチフレーズ 『まかせなさい！大学生活』 面倒見の良い
—— 夢チャレンジ

2 方略

- ・ 少人数ゼミで夢チャレンジをサポートする
夢チャレンジシート（学生個人）
特に理系の場合は、学生へのきめ細かい対応を行う呈親制度をつくる

3 実行計画

夢プロジェクト 理事長裁量経費で総額 1,000 万円を拠出
学生グループ

P D C A の繰り返し 見直しながら良いものは継続
プドチア
ラウエク
ン ッシ
クヨ
ン

チャレンジ入試（入口） 選べない → 誰でも受け入れる



（出口）夢チャレンジ達成

学部 経済、福祉、法
看護、理工、農 } 本当は 5 枚（5 学部）！の方が？

4 評価

学生の夢チャレンジ 満足度

達成度 外部評価なんて…

まとめ

選べない → 誰でも受け入れる



三本柱 {
・ 面倒見の良い
・ 個性を伸ばす
・ 地域の活性化に貢献

花笠班

司会者 小野澤 隆
記録者 山口 明子
発表者 脇 克志

1 大学の理念・目標

学生中心の大学（魅力ある大学）

生きる力、人間力をつける

→ 行動力

リーダーシップ

先頭に立つ！

自己学習力（生涯学習の必要性等）

キャッチフレーズ：自分が踊る大学

〔自主的，創造性，コミュニケーション

楽しむ，継続性，集中力，達成感，自信を持つ・・・

2 方略

自己発見と改善を教育システムとして行っていく

入学前からの自己採点（学生によるポートフォリオ作成）

具体的質問

これには教員も参加

{ 内から見た自分

{ 外から見た自分

3 実行計画

必修科目として少人数，グループ学習

1年：読む，書く，聴く，話す（プレゼンテーション）

地域との関わりも含め，各自の学生に力をつける

2年：問題 → 調査 → 提案 → 発表（専門性を含め，グループで課題設定する）

3年：インターンシップの義務化（100%）実社会に入る

・その宣伝，普及の方法 → プレゼンテーションをケーブルTVで流す

・組織論 → 専任副学長をおく。トップダウンの運営委員会で企画運営を行う

4 評価

3年終了時に基礎学力試験の実施，及び学部独自の試験の実施，その結果の公表

・卒業生からの評価（我が子を入学させたいと思えるような大学）

・（企業）就職先からの評価を継続的に受ける

いい班

司会者 洪 慈乙
記録者 君野 隆久
発表者 金子 勉

1 大学の理念・目標

- ・ 地域と協調した大学
 - ・ 開かれた大学
 - ・ 大学間競争に勝ち抜く大学
- 「人間力活性大学」

2 方略

- ・ 地域（地元）出身者の授業料減額（奨学金）
- ・ 他県からの移住者の行政的援助
- ・ 教育力の IT によるアピール

3 実行計画

- ・ 新学部の創設
 - ・ 水産資源, 環境観光
 - ・ 先端技術
- ・ 入試 センター＋独自の 2 次試験
- ・ 就職先・・・地元への誘致（地場産業の国際化）

4 評価

- ・ 就職先からの定期的評価
- ・ 資格取得率アップ



◆ 全体会記録

プログラムⅡ「どのような大学にするか」

総合司会 伊勢 隆之
記録者 阿部 成樹

E：『人間力活性大学』

方略：授業料の地域優遇策，移住のすすめ
教育力の IT によるアピール
計画：水産資源，環境観光，先端資源によるアピール
評価：就職先によるアンケート

D：『自分が踊る大学』 学生中心の大学で行動力をつける

方略：自己発見とその自覚を継続させる
計画：少人数グループ学習，課題設定，インターンシップ
評価：卒業生，企業による評価，学力試験の実施

C：『個性を伸ばし，地域の活性化に貢献できる人材育成』

方略：少人数ゼミ教育
計画：「夢プロジェクト」に 1,000 万円
夢チャレンジ入試（資格，鳥人間…）
評価：学生の満足度を最優先

B：『出会って考えて対話を深められる大学』 学生，教員，地域間の出会いと対話

方略・計画：対地域広報（共催イベント），少人数教育
入試における集団討論，プロジェクト型授業（地元への参加）
評価：学長，副学長との面談

A：『地域が支える大学，地域に開かれた大学』 = 『おらが大学』

方略：地域に学ぶ（プレインターンシップ，インターンシップ）
地域への貢献（学生による〇〇教室の開催）
計画：ロゴ，キャッチフレーズ（1 年目）
企業，自治体との協力（2 年目）
実行（3 年目）
評価：就職率のみでなく定着力

Q & A

Bへ：プロジェクト型とは？—— 地域との共同作業を通じて思考力を伸ばす

Aへ：何年いてもいい大学の「就職率」とは？—— 卒業時のそれである

Aへ：定着率は調べられるか？—— 親の協力が必要だが難しいだろう

Dへ：リーダーシップの養成法は？—— 各自がリーダーを経験するような授業

全員インターンシップを経験

ポートフォリオの充実

副学長：入学卒業前後における関与（いつでも学びにこれる大学）を考える必要がある

プログラムⅢ 「科目設計1:授業名と目標の設計」

◆ グループ作業記録

やっぱりええ班

司会者 木谷 康子
 記録者 鈴木 均
 発表者 坂本 明美

大学「とっともええ生活科学大学」

農・食・生活科学 定員150人

生活資源コース

生活科学コース

生活環境コース

授業科目名 「食べ物からみる循環型社会」 必修科目（共通）

【学習目標】

- ・ 循環型社会を目指さなければならない理由を理解できる
- ・ 旬がわかる
- ・ 無農薬栽培，減農薬栽培，コストパフォーマンスについて理解できる
- ・ 消費型社会の危険に気づく
- ・ 栽培を実施する → 食べる → 残し → たい肥にする

【到達目標】

- ・ 循環型社会について説明できる
- ・ " " を生活の場で実践できる

ペア班

司会者 阿部 宏慈
 記録者 高橋 哲也
 発表者 加藤 大鶴

授業科目名 「知る・感じる・作る—地球が大学に望むものとは—」

【学習目標】

☆学習者が 地域住民とコミュニケーションし，
他の学生と協調しつつ，
自ら考え，大学として何が貢献できるか を考える

- 1) 「大学と地域が連携すること」は何なのか（学生のモチベーションのためにも）
 - ・ 地域，大学のデータを与え，それぞれの問題と役割，連携することの重要性を知ってもらう
- 2) 地域の問題を発見する
 - ・ フィールドに出て，インタビューやアンケートなどの手法で問題を見出し，感じる
- 3) 改善策を考える
 - ・ 調査結果をもとに，具体的に改善策，大学・地域の連携を考える
- 4) 発表と提言
 - ・ 大学内での発表だけでなく，実際に市民ホールなどで地域に向けて発信する

【到達目標】

☆問題を発見し，考え，提言していける思考力，計画力，表現力を身につける

オリンピック班

司会者 脇 克志
記録者 角南 俊介
発表者 佐野 正人

【学習目標】

- 1) 地域と世界の橋渡しをすることができる
- 2) 日本の歴史・文化を発信することができる
- 3) 共に生きる為の相互理解をすることができる

【到達目標】

- 1) ボランティアに参加する
(→ 地元在住の外国人と地域の人々との橋渡し)
- 2) 日本の(伝統)文化を1つは修得する
(→ 自分を見直す)
- 3) 自国の問題を他国の人に説明できる
(→ 語学力, コミュニケーション能力)

授業科目名 「国際的相互理解」

台風七号班

司会者 野崎 直樹
記録者 吉川 一枝
発表者 村山秀次郎

授業科目名 「母なる地球」

★ 21世紀の諸課題

学生が興味・関心を示すテーマ 『地球環境問題』

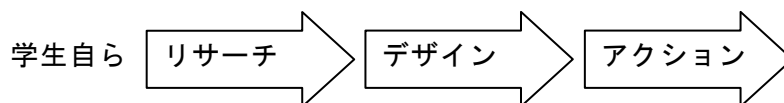
【学習目標】

“環境”をキーワードに環境に関する諸問題をとりあげ学習を進める

→ 人口問題 宗教 南北 エネルギー

【到達目標】

- ①自ら(学生)課題を見つけ出すことができる
- ②課題に対し, 学生自ら行動(調査)することができる
★インターネットのみではなく地元, 現場での調査
- ③調査結果から, 学生自ら諸問題との関連に気づき, 問題点を指摘できるようになる
- ④意見の相違, 個性を認め合うことができる



出羽桜班

司会者 齊藤 敦
記録者 夏原 和美
発表者 小野澤 隆

職業意識と労働意欲を培う授業

- (1) 学生による学習を中心にするために
グループワーク テーマが個々の学生によって違ったものを持っているので
引き出すことができれば面白い
(テーマの展開 2～3テーマ(15回))
- (2) 大学に対する社会的ニーズ
対人関係がしてくれる 学年は1年生 後半
応用につなげられる基礎学力、企画力 入学したときから働くという事を
意識して学べるようにするため
- (3) 大学の全体的な教育目標
自ら学べる力を育む
社会貢献に役立つ力を身につける

学習目標の設定

社会の人に対してどのくらい本当に役に立つプレゼンができるか
現実味をおびた計画が立てられるか

記述 仮タイトル → 本タイトル 「働くわたし」

【授業の目標】

- ・大きな社会への視野を広げる
- ・働くことに関して必要な能力がわかる



職業意識・労働意欲に関連する

【到達目標】

- ・自分の長所、欠点を認識することができる
- ・意見の異なる相手とコミュニケーションできる

⋮
その他

◆ 全体会記録

プログラムⅢ「科目設計 1 : 授業名と目標の設定」

総合司会 杉山 肇
記録者 山口 明子

A 班 : 大学の個性を発揮する授業 「食べ物から見る循環型社会」

食に関わる様々なこと, 旬が分かる, 無農薬の食物
循環型社会を人に説明することができる
単科大学 少人数教育を大切に 実習も含めた授業

B 班 : 地域性と関連する授業 : 大学と地域の連携

「知る・感じる・つくる—地域が大学に望むものとは—」

- ・ 目標として, 学習者が地域住民とコミュニケーションし, 他の学生と協調しつつ, 自ら考え, 大学として何か貢献できる力を提言する
- ・ 問題を発見し, 考え, 提言していける思考力, 計画力, 表現力を身につける

C 班 : 国際性を培う授業 「国際的相互理解」

- ・ 地域と世界の人を橋渡しする
- ・ 日本の歴史と文化を発信することができる
- ・ 共に生きる為の相互理解を深めることができる
- ① ボランティアに参加する
- ② 日本の(伝統)文化を修得する : 自分を見直す
- ③ 自国の問題を他国の人に説明できる : 語学力, コミュニケーション

Q : 到達目標すべてでは無理?

A : 3 点はオーバーラップしている 地域を含め人とのやりとりを大切にしている

Q : 国際理解が発信型か?

A : 発信を協調しているが両方である

Q : 理解することが共に生きることになるのか?

A : よく知っていることと理解とは別, 相手を理解することと生きる知恵とは別

D 班 : 21 世紀の諸課題に対応する授業 「母なる地球」

“環境” をキーワードに, 環境に関する諸問題を取り上げ学習を進める

- ① 自らの課題を見つけ出すことができる
 - ② 課題に対して自ら行動することができる
- リサーチ → デザイン → アクション する教科

E 班 : 職業意識と労働意欲を培う授業 「働くわたし」

働くことを意識して学ぶ 1 年生を対象にする
対人関係がつけれる
応用につなげられる基礎力・企画プレゼン能力をあげる

Q : 現場の教育・フィールドワークについては?

A : 1 年生であること, まだ自分の目標がはっきりしていない学生を対象にした学部によっても違う

Q : プレゼンをするのが目標か?

A : 能力をつけることが社会にどれだけ貢献するかが問われる
1 年生なので能力をつけることで労働意欲と学びにつなげる

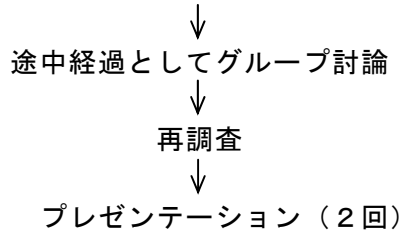
プログラムⅣ 「科目設計2:授業内容の作成」

◆ グループ作業記録

やっぱりええ班

司会者 庄司 英明
記録者 坂本 明美
発表者 君野 隆久

1. オリエンテーション, 概論, グループ分け
2. リサーチとプレゼンテーション
 <生産> <消費> <循環>の3分野に分かれる(希望)
 1グループ10人×15グループ=150人
 15グループが上記の3分野に分かれる
 <生産>…農家(有機栽培の農家と, 一般の農家との比較)
 <消費>…ファミリーレストラン, 生協
 <循環>…ゴミ収集現場



3. 実習
 4月に野菜の植え付けをしておく
 (例) だだちゃ豆, ほうれん草, きゅうり, なす, しそ, メロンなど
 最後には調理実習も入れる
 (例) 旬の枝豆と冷凍枝豆との比較
4. 講義(グループ発表が終わってから)
 リサイクル社会の生活と文化
 江戸のリサイクル社会
 食以外の循環型社会
 地域環境規模での循環
 食品加工

ベア班

司会者 伊勢 孝之
記録者 鈴木 育子
発表者 切田 節子

知る 講義 5 回

受講学生 48 名

1 回：オリエンテーション

授業主旨の説明，教員（3 名）紹介，グループ編成（6 人×8 G）

3 回：地域を知る・理解するための講義

- ・地域との連携の重要性
- ・地域に関するデータ（産業構造，人口構造，他）提示
- ・地域が抱える問題

地域・・・学校周辺の商店街
役所・公的機関

1 回：フィールドワークのガイダンス（調査手法の指導） 課題設定

教員の内 1 名は社会調査に詳しい教員とする

感じる フィールドワーク 5 回 セミナー室利用

グループ作業 調査（インタビュー，アンケート，インターネット）



分析（ディスカッション，中間報告，相談）

レジメ A 4 1 枚提出

社会調査指導を行う

作る プレゼンテーション 4 回 提言のまとめ

2 回：プレゼンテーション準備

提言のまとめ



2 回：発表

まとめ 1 回

評価に利用するもの

- ・アンケートシート
- ・発表
- ・レポート

地域への貢献

- ・実現可能案を採用
- ・発表は公開
- ・インターネットでも配信

オリンピック班

司会者 山口 明子
記録者 脇 克志
発表者 洪 慈乙

☆授業内容 受講者数 30 人

1～2：イントロダクション

- ・講義内容・到達目標を明示
- ・グループ編成（6人で5グループ）
- ・学生の持つ「日本文化」のイメージを収集
- ・出てきた「日本文化」から各グループが選択したものに具体的な課題をつけて次週までに調べさせる

3～4：歴史・背景を発表する（グループ毎）

5～6：現状について発表する（グループ毎）

7～8：各「日本文化」に関連する「～連盟」に行き「インタビュー」をして内容を発表する

9～10：個別の相互説明を行う演習

（異なるグループで相互に自分たちの「日本文化」を説明する）

11～14：在日外国人に「インタビュー」

今までに調べた「日本文化」を紹介しながら外国人との相互理解を深める

15：結果発表



台風七号班

司会者 大場 好弘
 記録者 堤 和司
 発表者 阿部 成樹

『母なる地球』

指導教員：4 人（2 グループ担当）

1 グループ：6 人 × 8 グループ = 48 人

4 つのキーワード

人口問題 宗教 南北 エネルギー

環境

4 テーマを 2 グループで

学習方法：能動的

- ①オリエンテーション：主旨，グループ分，指導教員「キーワード」を与える
- ⑧中間発表：同テーマの他のグループのせめ方を確認
軌道修正
- ⑭発表
- ⑮報告書作成

進め方の例

人口問題

- ①予備調査：文献，HP
 - ・質問内容決定
 - ・質問相手決定
 - ・国の例 中国，インド，ブラジル，
バングラディッシュ，日本 等
- ②実際の調査
 - ・学生自らアポ取り
 - ・インタビュー
- ③中間発表（8 回目）
 - ・口頭で OHP，PP
 - ・評価 → 改めて方針，方向性
- ④再調査
- ⑤発表会（14 回目）
 - ・ポスター 全員発表 ☆インタビューの協力者にも聞いてもらう
 - ・学生による総合評価
- ⑥報告書作成

資源

人的 留学生，学内研究者，自治体職員
 物的（場所） 図書館，情報センター，役所
 （媒体） 中間 OHP，パワーポイント
 最終 ポスター
 報告書 コンピュータで
 予算 200,000 円

出羽桜班

司会者 藤野 祐一
記録者 小野澤 隆
発表者 廣中 圭司

職業意識と労働意欲を培う授業：授業名『働くわたし』

I. 学習方法：グループ討議，ディベート（クラスサイズ50人，9グループに分ける）

自己学習・グループ学習 → まとめ → プレゼン

↑
プレゼンを評価することで
人に伝わるプレゼン方法がわかる

学習のための資源 1) 人…大学の就職課の人，先輩
2) 場所…机が動かせる教室
媒体…PPT

II. 授業内容（3段階）

①～導入～ 『なぜ働くのか』

- ・働くべき・働く必要ない 2グループにわけてディベート → 全員がこの授業で やっていくことを認識
- ・履歴書を書く お互いのものを批評
履歴書作成，ディベートを通して自己発見

②～発展～ 『大学の就職戦略を知る』

インターンシップ，適正テストなど，どうしてそういうことが行われているのかを調べて発表

↓
就職課の人，先輩など 現場の話，実際の話聞く

③～まとめ～

ある職に就くための残り3年の過ごし方について，グループ毎にまとめて発表
・プレゼン
・プレゼンの仕方の反省

↑
批評

最後

- ・履歴書を再作成
- ・2年次以降の履修計画を立てる } 各自が到達目標を考えながら
→ 最初のものと比較できる 自分がどう変化したのか

III. 媒体

パワーポイント（プレゼン能力を学ぶ）

◆ 全体会記録

プログラムⅣ「科目設計 2：授業内容の作成」

総合司会 野崎 直樹
記録者 吉川 一枝

〈Ⅳの課題〉前時で作成した授業について学習方法の道筋を明示する

Q & A

Aへ：循環型社会を学ぶということだが、地域の 1 年中いつでも食べられるような食物と食べ比べてみては？

→ その通りです。忘れていました。（冷凍のただちや豆と比べてみるなど）

Cへ：ボランティアに教員・学生が入り込むのは難しいのでは？

→ 今回はボランティアは削除し、インタビューに変えた。

留学生の存在は？

→ 留学生“いる”という設定でその文化を調べ、紹介し、同じプロセスで参加

Eへ：自分が今不足している能力を認識してもらう方向がよい

科目ありきでないのでは？

→ その通りです

すべての班へ：どのように評価するのか？

→ 次の時間へ

A以外へ：指導教員は何人か？

A—3人（10人—1G—3人3人4人）

→ B—3人, E—2人, D—4人, C—1人

Aへ：150人学生に教員3人で大丈夫か？

→ ベテラン教員, ボランティアの活用も考えている

Aへ：10人グループとかなり多い中で、個人個人の学生が自分で考え、行動できるのか？

→ 人数少ない

プログラム V 「科目設計3:シラバスの完成」

◆ グループ作業記録

やっばりええ班

授業科目名 『食べ物からみる循環型社会』 担当教員： 安田，木谷，坂本 担当教員の所属： 各コース 開講学年： 1年 開講学期： 前期 単位数： 2単位 開講形態： 講義・実習 開講対象： 1年 科目区分： 共通必修	
【授業概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ 食べ物の生産・消費・廃棄を通して循環型社会を考え、体験する ・ねらい 循環型社会について知り、自分自身の生活としてとらえ、実践できる能力の育成 ・目標 消費型社会の危険に気づく 循環型社会を目指さなければならない理由を理解する 無農薬栽培，減農薬栽培のコストパフォーマンスを知る 栽培，収穫，調理，廃棄，堆肥化のプロセスを知る 旬が分かり，味わう ・キーワード 循環型社会，地産地消，旬，有機栽培，環境問題，スローフード，ゴミ問題 	
【授業計画】 <ul style="list-style-type: none"> ・授業の方法 講義，調査，プレゼンテーション，実習 ・日 程 <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②グループごとのリサーチ（生産，消費，循環，現場） ③調査結果の調整 ④追加リサーチ ⑤～⑥プレゼンテーション ⑦リサイクル社会の生活と文化（1） ⑧リサイクル社会の生活と文化（2） ⑨食以外の循環 ⑩地球規模での循環 ⑪～⑫食品加工（講義） 旬を食べる，加工する（調理実習） 堆肥化とは ⑬～⑭プレゼンテーション，評価 	<p>農作業カレンダー</p> <p>畑の整備</p> <p>種まき</p> <p>栽培管理</p> <p>収穫</p> <p>堆肥づくり</p> <p>水やり</p> <p>T A活用</p>
【学習の方法】 <ul style="list-style-type: none"> ・受講のあり方 積極的に演習，実習，調査に参加する ・予習のあり方 畑の手入れ，成長観察 ・復習のあり方 日常生活での実践 	
【成績評価の方法】 <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価基準 →60点以上を合格とする ・方法 出席は2/3以上でないと評価しない グループ発表（40%） レポート（40%） 現物評価（品評会）（20%） 	
【テキスト】 特になし	
【参考書】	
【科目の位置付け】	
【その他】 <ul style="list-style-type: none"> ・学生へのメッセージ ・履修のに当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野 	

ペア班

授業科目名 『知る・感じる・作る—地域が大学にのぞむことは—』 担当教員： 山形太郎・次郎・花子 担当教員の所属： 1年 開講学年： 1年 開講学期： 後期 単位数： 2単位 開講形態： 講義および演習 開講対象： 全学部 科目区分： 総合
【授業概要】 <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ 大学と地域の連携 ・ねらい 大学が地域と連携することの重要性を知ると共に、地域の情報を知る 地域住民とコミュニケーションし問題を肌で感じる 他の学生と協調しながら、課題を発見する 大学として、奇異期に貢献できるような提言をつくる ・目標 共同作業を通じて、問題を発見し、考え、提言していけるコミュニケーション能力、思考力、計画力、表現力を身につける ・キーワード 地域貢献
【授業計画】 <ul style="list-style-type: none"> ・授業の方法 6人程度のグループ単位で作業を行う はじめに教員3名によるオリエンテーションを行い、授業をすすめる アンケート、インタビューの手法を用いてフィールドワークを行う その間、セミナー室ではフィールドワークの成果をまとめていく ・日 程 <ol style="list-style-type: none"> ①オリエンテーション ②～④講義：地域を知る 理解するための講義 ⑤調査手法の指導、課題設定の発表 ⑥～⑩フィールドワーク ⑪～⑭プレゼンテーション 発表と提言 ⑮まとめ
【学習の方法】 <ul style="list-style-type: none"> ・受講のあり方 学生がテーマまで認定しフィールドワークを行う授業なので、主体的かつ積極的に関わらなければならない ・予習のあり方 事前にフィールドワークを行う地域について、インターネットや書籍を参考にしながら知識を深めておくこと ・復習のあり方 セミナールームでのディスカッションや成果のまとめ
【成績評価の方法】 <ul style="list-style-type: none"> ・成績評価基準 発表・提言の妥当性、実現性 フィールドワークを含めた授業参加の積極性 ・方法 アンケートシート（20） 発表・提言（40） レポート（40） 他グループの意見を参考にしながら、得られた知見をまとめる
【テキスト】 特になし
【参考書】 特になし
【科目の位置付け】 一般教養・総合
【その他】 <ul style="list-style-type: none"> ・学生へのメッセージ ・履修のに当たっての留意点 ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野 社会学，地域経済学，環境地理学

オリンピック班

授業科目名 『国際相互理解』 担当教員： Mr.Olympic 担当教員の所属：			
開講学年：	開講学期： 後期	単位数： 2 単位	開講形態： 講義
開講対象： 全学部	科目区分：		
【授業概要】 ・テーマ 国際性を培う授業 ・ねらい 地域と世界の人を橋渡しする 日本の歴史・文化を発信することができる 共に生きる為の相互理解を深めることができる ・目標 ボランティアに参加する 日本の伝統文化を1つは修得する 自国の問題を他国の人に説明できる ・キーワード コミュニケーション			
【授業計画】 ・授業の方法 少人数グループ単位による調査・学習（フィールドワークを含む） ・日 程 ①～②イントロダクション ・講義内容・到達目標明示 ・グループ編成（6人で5グループ） ・学生のもつ「日本文化」のイメージを収集 ・出てきた「日本文化」から各グループが選択したものに具体的な課題をつけて調べさせる ③～④歴史・背景を発表する（グループ毎） ⑤～⑥現状について発表する（グループ毎） ⑦～⑧各「日本文化」に関連する「～連盟」に行き、「インタビュー」をして内容を発表する ⑨～⑩個別の相互説明を行う演習（異なるグループで相互に自分たちの「日本文化」説明する） ⑪～⑭在日外国人との「インタビュー」 今まで調べた「日本文化」を紹介しながら、外国人との相互理解を深める ⑮結果発表			
【学習の方法】 ・受講のあり方 グループで調べた結果を発表する 相手の発表内容を理解する インタビューを通じて異文化交流を実践する ・予習のあり方 グループ学習（文献調査、ネット検索など） ・復習のあり方 形式的評価を行って、フィールドワークに生かす			
【成績評価の方法】 ・成績評価基 筆記テスト：40%，レポート（フィールドワーク）：60% ・方法 各グループから1題ずつ問題提示（従って全部で5題） それに対して、各人が他のグループから提示された4題について解答する			
【テキスト】 特になし			
【参考書】 特になし			
【科目の位置付け】 教養科目			
【その他】 ・学生へのメッセージ 英語に堪能である必要はなし ・履修のに当たっての留意点 グループ活動に積極的に参加できること ・オフィスアワー 週1回（月曜日 4；20～5：50PM） ・担当教員の専門分野			

出羽桜班

授業科目名 『働くわたし (We will work)』 担当教員： 担当教員の所属： 開講学年： 1 年 開講学期： 前期 単位数： 2 単位 開講形態： 演習 開講対象： 全学部 科目区分：			
【授業概要】 ・テーマ 職業意識と労働意欲を培う ・ねらい 自らを知り，自らの将来性を創造する 社会人として必要な能力を身につける 就職活動を積極的に行うことができる ・目標 自分の長所・短所を説明することができる 意見の異なる相手とコミュニケーションできる 大学生活の中で身につけるべき事を述べる 就職するまでのタイムテーブルを作ることができる ・キーワード 自分を知る，就職活動，社会を知る			
【授業計画】 ・授業の方法 6 人グループでのグループワーク，自ら調べ，まとめ，プレゼンテーションし，それに対する 評価・討議を行う 外部講師（OB，就職課など）を招き，現場を知る ・日 程 ①「なぜ働くのか？」に関して，働く必要がある・ないの 2 派に分け，ディベートを行う 履歴書を作成する ②～④お互いの履歴書を批評する ⑤「魅力的な履歴書とは何か」外部講師（就職課） ⑥就職活動について（インターンシップ，適性検査，集団面接など） 就職に関連するテーマについて調べ，まとめて発表する準備 ⑦～⑧各班の発表・プレゼンテーション それに対しての批評・討議 ⑨～⑩「就職について」企業から 2 人，OB・OG 2 人，計 4 人の話を聞き調べた内容と比較する ⑪～⑫各班で，つきたい職業を選択し，実現する為に必要な能力，資格，戦略，それをどう身につ けていくか，について調べ，まとめて発表する準備 ⑬～⑭各班の発表・プレゼンテーションに対しての批評・討議 ⑮履歴書の完成 なりたい自分になるために必要な能力を身につけられる履修モデルの作成， 及び就職するまでのタイムテーブルを作成			
【学習の方法】 ・受講のあり方 グループ討論には積極的に参加し，討論の内容を記録する 外部講師の話を，内容を整理しながら記録する ・予習のあり方 図書館，インターネットのみならず，インタビューなども用いながら発表の用意をすること ・復習のあり方 発表に対する反応をもとに，なぜそのような意見が出たのかについて再度考える			
【成績評価の方法】 ・成績評価基準 ・方法 ⑤終了時「自分の作成した履歴書について」レポート：10 点 ⑩終了時「就職について」レポート：10 点 終了後レポート「2 つの履歴書を比較して」：30 点 最終の履歴書・履修モデル・タイムテーブル：各 10 点 ⑦・⑧の発表についての批評レポート：10 点 ⑬・⑭の発表についての批評レポート：10 点 <div style="float: right; margin-left: 20px;">} 総合評価</div>			
【テキスト】 プリント配布，自分たちの行ったプレゼンテーション			
【参考書】 特になし			
【科目の位置付け】 一般教養科目			
【その他】 ・学生へのメッセージ 自分を発見しよう！ ・履修のに当たっての留意点 積極的に！！ ・オフィスアワー ・担当教員の専門分野			

◆ 全体会記録

プログラム V 「科目設計 3 : シラバスの完成」

総合司会 藤野 祐一
記録者 齋藤 敦

各班完成したシラバスについての発表が行われた

Q & A

A 班→ E 班 : ディベートをなぜ 1 回目に設定したか？
→ 授業を受ける動機づけのため
その方法は無作為に 2 派に分ける？
→ yes

D 班→ A 班 : 旬は春夏秋冬行った方がよいのか？
→ 考えている
→ E 班 : 時期が早すぎるのでは？
→ 目的は自分を知ることが重視している
→ C 班 : 発表についての評価は？
→ 行う予定

C 班→ D 班 : 内容が人間力を身につけるものか？
→ ディスカッションにより身に付くだろう。またフィールドワークも重要

副学長→ D 班 : タイトルミスでは？
→ …

C 班→ E 班 : 個人情報についてのケアは？
→ 適格な方法を考えている